



発南
紀和歌屋
下屋 TEL/E-Mail
H・P:



毎年同じ事を言いますが、今夏は八月の中頃から急に猛暑になった様な気がします。私が子供の頃は、暑いと言っても、二八、九度止まりだったようで「三〇度になったら泳ぎに連れて行ってあげる」との言葉に「三〇度になれば・三〇度になれば」と温度計に息を吹きかけて、やつとの思いで三〇度にして、泳ぎに連れて行ってもらったのを思い出します。

まだまだ、残暑厳しい日が続きますので、体調を崩さないよう、ご自愛下さい。
編集員一同

『今日』

灼熱のベランダに、メスのクマゼミが一匹お向けになって死んでいた。朝には何もなかったのに・・・この個体のこの世での生

は終わった。小さな生涯。どこから来て、どこを死に場所に選んだのか。オスの腹にはオレンジ色のポケット状のものが一對

ある。鳴き声の大きなオスがメスの気を引くという。真夏のあのにぎやかな声は、オスの生を懸けた闘いでもあるらしい。今、生きている自分も、どんな生物も、間違いなく命の終わりを迎える。まだ、八月にもならない

日に、初めてツクツクホウシの声を聞いたのには驚いた。例年は、お盆過ぎから鳴き始めることが多く、学生だったころの私は残り少ない夏休みを悟る。

それにしても異常な早さで出ました「ツクツクホウシ様」何がそうさせたのか、と思わずにはいられない。大型化している台風、豪雨、地球を覆う大海の上空の気流の巡りが、昔 不便な生活を営んでいた時代とは明らかに異なっている。

おそらく人間のなす行動がそういった事象を引き起こしているのでは・・・。熱帯雨林を壊し、海を理

めて、山を崩し・・・人間は何のためにそれを繰り返すのか？

そう言っている自分も、山を崩して造成した場所に住んでいる。そこに生きていた木々や生き物たち、ごめんなさい。

「木の栄養になってよみ返つてネ。」と言いつつ、根元にそつと置いた。

〈美・笑〉



子どもの頃、兄の後について、裸足で小川の魚を夢中に追いかけ、野山の栗やアケビを喜々として取った。足や手にトゲが刺さることもしばしばあった。そのたびに、手や針でトゲを抜くのだが、上手なものだ。喉にも刺さったことがあった。それは魚の骨だが、手を突っ込んで取ろうとする、ウエーツとえずきなかなか取れない。ご飯の固まりを飲み込んだらいと母から言われ、思いつき大きなご飯の固まりを飲み込んで、喉を詰まらせたこともあった。

そんな無邪気な私に、いつ頃から難しいトゲが刺さった。そのトゲとは赤面恐怖症、対人恐怖症とでもいうのだろうか、人前に出ると異常に胸がドキドキし、顔が赤くなる、相手の顔を見られない、頭の中がパニックになってしどろもどろになる、まともに話せないというものだ。これでは人間関係も持てない、社会生活も、仕事にも大きな支障をきたす。手足に刺さったトゲとは全く勝手が違う。抜こうともがけばもがくほど深く食い込んで、私を痛めつける。自分ではどうし

ようもない。そんな時、兄が駆で一枚の教会案内を拾い、教会に行くようになった。幼い時

「トゲ」

のよう。に私も兄の後に追つた。そこで初めてイエス・キリストの話を聞いた。この方は人類の罪を背負い、身代わりになって十字架について死なれ

た。彼はその十字架の上から叫ばれた。父よ、彼らをゆるしたまえ、と。何と、自分を十字架につけた人々

の赦しを祈られたのだ。その後、彼は死を打ち破つて復活された。このイエス・キリストは私たちを救う為に、天地万物の創造者であ

る神であるにもかかわらず、この世に人間の姿を取つてきて下さった方である。」と。

私はこれ聞いて、この真実な方が天地方物の創造者である神なら、この私をも新しく造りかえて下さる、と思つた。よし、このイエス・キリストを信じて行こう、と決心した。トゲは抜けた。いや、抜けたと思つた。しかし、抜けていなかった。そして、いまだにトゲは刺さつたままである。私は私のままである。何も変わったわけではな

隙に、どこかに迷い出してしましました。ある金曜日のことでした。その文鳥が園庭に迷い込み、見つけたM先生は捕まえて大切に保管し、持ち主を捜していました。園児と共に餌をやり、話しかけ、一羽では寂しいだろうと文鳥の絵を描き、カゴに貼ったり、みんなで精一杯の愛情を注いでいました。園の玄関の掲示板上に文鳥の写真を貼り、「お探してはありませんか」

迷い込んだ

火曜日の朝、持ち主のさんが、「文鳥がこちらにいると聞いたので・・・」と目に涙を一杯ためて訪てきました。まだ保育園なので、一瞬少し待つて頂うと思いましたが、興奮の様子を見るとお待たせするのは酷な気がし、早速の部屋に案内し、先生に事情をお話しました。M先生はすぐに気持ちを汲み、下さり、各教室の園児達にお別れをさせ、すぐに引取らせてくれました。きともう猫かカラスに食べられてしまつていいるだろうと、夜も眠れない程心配していたそうです。自分の子どもを愛するうに、大切にしていた文鳥が元気に生きていた訳で

い。ただ、変わったのは私が見る方向である。今まで見ていたのは自分のことばかりであった。しかし、それからはイエス・キリストを見て、信じて生きるようになった。トゲとの戦いは続く。

しかし、一人ではない。恵みの主イエスが共にいて下さる。以下、使徒パウロの告白だ。『・・・思い上がることのないように、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いで

す。この使いについて、隠れ去らせてくださるよ。に、わたしは三度主に願いました。すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で、そ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしのに宿るように、むしろ大に喜んで自分の弱さを誇ましよう。』(コリントの信徒への手紙二・十二：七、九)トゲ、弱さ、病いは好しいものではないが、人謙遜にさせ、真実な方と出会いを得させる。